

## 飽食の時代に生きて

アジア研究会：永松 幸子

あと 10 分。駆け込んだスーパーマーケットに息を弾ませ何とか間に合った総菜売り場。

夕飯のおかず数品を手に取り、ふと視線を上げて回りを見渡すと、間もなく終了というのに山と積み残されたお惣菜が何種類も残っている。お惣菜以外にお寿司やサンドイッチ、鮮魚だっている。

残されたそれらの品々のほとんどは廃棄なのか・・・店員さんが持ち帰ったとしてもたかが知れている。

スーパーに限ったことではない。コンビニだって同じ。スーパーよりコンビニの方が店舗数は圧倒的に多い。コンビニより店舗数の多いのは飲食店だ。時間切れは味も落ちるので大半は廃棄されると聞く。

この小さな所沢の街より都内では、日本全域では、そして世界中では・・・1日に廃棄される食料品の膨大な量・・・そんなことを考えながらの帰り道、数パックの総菜を入れた軽いレジ袋が突然ずっしりと重たくなった。

1・2年前、佐久間ドロップが販売終了となるニュースを見て、普段は買った事もなかった佐久間ドロップを店で探しても既に見付からず、ネットで約倍ほどの値段で販売されているのを見付けて買ってしまった。



私はかろうじて戦後に生まれた。戦時中、そして敗戦直後の踏みしめれば火傷しそうな焼土を駆け回って生きて記憶はないが、戦中戦後のカオスを体験した作家・野坂昭如氏は自らを焼跡派と称し、敗戦の混沌とした時代を生きた子供時代を「火垂るの墓」に記している。

両親はなく妹とふたり、敗戦直後の街中を1日の食糧を求めて駆け回り、何とか確保したものの育ちざかりの身体は妹に分け与える事も儘ならず、妹はやがて餓死してしまう。妹が大好きだった佐久間ドロップの缶の中に妹の骨を入れて持ち歩いていた、ある日・・・

かなり昔だったがアニメで見て強いショックを受けた。

あまりに辛い内容に、以来1度きりしか見ていない。野坂氏はそんな妹の十字架を背負い戦後生き延び、作家・評論家として、その他TVでもその歯切れのよい論調が話題となる人となった。

環境は各人違っても同じ時代を生きた大島渚氏や西部邁氏らと共に「朝まで生テレビ」では、真面目で辛辣なバトルトークが面白くて、いつも笑いながら祝っていた記憶がある。

その時代を生き抜いた人にしか分からない人生観や価値観がその人を創っているのだとしたら、時代の航路を拓く宇宙船は、もう彼らを置いて遙か遠い異世界へ舵を切ってしまったのかも知れない。

彼らを時代遅れと言うつもりはない。彼らの生きた土壌の上に今の日本は築かれたのだから。

しかしその時代を生きた人々は年々減り、戦後ばかりを乗せた宇宙船はやがて迷走し始め、暴走が始まっていることに気付いている人は少ない。飽食の海に暮らし、やがて来るかも知れない飢餓の海に墜没することなど予想もしたくない人々がほとんどなのだ。



今年の「ところざわ倶楽部まつり」の発表会で、食糧難が課題に取り上げられた。

我が国の食料自給率は38%しかない現在、※飼育交換率の高い昆虫食を食べられるか否か問われても、「う～ん」と考えてしまった。今の飽食の時代に創造できないのだ。

※食料1Kgの収穫を得るために何Kgの飼料が必要かを示す数値。高ければ高いほど、少ない飼料で効率的に食料を収穫できるとされている。昆虫の飼育交換率は50%。一方、牛(可食部)の飼育交換率はたったの0.04%で、1Kgあたり25Kgもの飼料が必要となる。

昔、山深い村々ではたんぱく質が中々手に入らず、蜂の子を食べていたことは知られている。今の時代にあっても一部地域では蜂の子を瓶詰にして売っているらしい。慣れてしまえば美味しいものなのかも知れない。

飽和状態から溢れ出た食物は捨てられる現代では「食べ慣れる努力」をする人はほとんどいない。「食べなければ生きられない」という極限の現実にしたされた時、初めて口にできるように思う。

戦争や天変地異等、今までの日常を覆す現実という体験が、新しい食文化やその流通を生み出すのかも知れない。すべては体験しないと動かないのが人間の弱さや愚かさなのだろうか。



佐久間ドロップは買っただけで封も開けず、今も冷蔵庫の片隅に佇んでいる。もう買うことができないから食べないのではなく、別に食べたくもないから封を開けないだけなのだ。

そんな佐久間ドロップの缶の中で節子ちゃん(野坂の妹)が目を見ましたとしたら、今の世の中を見てなんというだろうか。

あと10分。今日も駆け込んだスーパーの店内では、間もなく行き場を失う総菜達がやり場のない思いをパックに詰めて、あと10分の命を終わろうとしている。





#### 【あらすじ】

物語では二人共死んでしまうが、実際は兄の野坂氏は生き延びた。生きるために集めた食料を十分に妹に与えることなく、時には横取りしたこともあったという。現実と物語が混在しているが、大筋は野坂氏の体験を元に描かれている。

ふたりで遊んだ蛍との思い出。妹は蛍と同じように儂い命を終えた。死んだ妹を10代半ばの少年が一人で茶毘に伏し、その骨を妹が大好きだった佐久間ドロップの缶に入れて持ち歩いていた・・・一生消えない妹への鎮魂と哀悼の物語。

尚、この物語は映画化もされているようだ。

#### 【予告編】

[https://www.youtube.com/watch?v=I0aDi5D\\_QjA](https://www.youtube.com/watch?v=I0aDi5D_QjA)

※ctrl キーを押しながらポインターをアドレスの上に置き、指マークが出たらクリックしてください